

B：宮城県コース

斉藤恒久（1974年経済学部卒）

タイトル「現地を訪問して想うこと」

私は17年前、神戸で震災の体験をし、その後、仙台に2001年から05年まで単身赴任していただけたに、今回の東日本大震災人一倍関心を持っていました。仙台駅周辺を歩き交う人々は震災のことが過去のことのようにつえているのでしょうか。人々の表情は以前から知っている記憶のまま明るく、逆に安心しました。その後、松島で校友会の会員であり、震災を体験された木の屋水産・木村様の話を手紙に伺いました。大変な体験をされたなか、家族と従業員の安全確保を最優先に考えられ、次にやることは何か、しっかり見極め、復興の道を歩み始められました。それも、復興するんだという、強い意志があっただけで実現できることであり、それを見事に実践されたこと、驚嘆に値すると思います。震災からまだ1年7か月経過したばかりです。阪神大震災の時も言われたことですが、復旧と復興は違うということです。被災地を訪れても復興はおろか、復旧が始まったばかりです。国や自治体は鉄道、道路、港湾といった公共性の高い施設の復旧を最優先させます。住民の生活基盤の整備は後回しになっています。もてる者が早く復旧・復興し、そうでない多くの人は取り残されたままになります。そうすると、震災時、「絆」で結ばれていた人々の心が徐々に遊離していくのではないかと危惧しています。復興予算の使われ方にも大いに疑問があります。本当に必要とする人々に早く援助の手が差し出されますように期待します。恒久的な住居の提供が急がれます。

一人の人間のできることは限られています。「一人は万人のために、万人は一人のために」の精神が生かされるべきと考えます。ひとりひとりが常に、何ができるか考え続けることが大切だと思います。今できることは現地を訪れ、風化し始めた現状を再確認し、一体感を深め、現地で買い物をすることが一番の支援になります。被災に遭われた人々を勇気づけることになると思います。常に、前向きに生きようとする人には必ず復旧・復興すると信じています。そして、いつまでも関心を持ち、支援する心を持ち続けていきたいと思えます。今回のツアーはやや風化し始めた現状の厳しさを見つめ直すのに、絶好に機会であったと思います。この機会を提供して頂いた、母校・立命館に感謝申し上げます。

最後にこの企画をされた母校・立命館は卒業生を大切にすることを再認識することができました。これは大きな成果だと考えます。本当に有難うございました。最近の母校の発展と存在感は実に誇らしげ見えます。大学が益々、名誉ある存在になることを切に望んでいます。又、私が勤務するシオノギ製薬には立命館出身者が現在、35名、在籍しています。全て私より若い人ばかりで、この体験を伝えていきたいと思っています。